



Title	ラス・カサスとペルー：『インディアス文明誌』に見るアンデスの文化(1)
Author(s)	染田, 秀藤
Citation	Estudios Hispánicos. 1996, 20, p. 149-169
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93823
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ラス・カサスとペルー

—『インディアス文明誌』に見るアンデスの文化— (1)

染 田 秀 藤

【はじめに】

もともとアンデス地方には文字言語が存在しなかったため、アンデスの文化、とくにインカ国家に関しては、従来、スペイン人が書き残した数多くのクロニカ（記録文書）にもとづいて、その実態が解き明かされてきた。しかし、大部分のクロニスタ（記録者）がインカ王朝をヨーロッパ流の単一王朝とみなす記述を残していることから分かるように^①、それらのクロニカには、無意識的にせよ、ヨーロッパ的視点から書き換えられたアンデスの情報が随所に認められる。中には、17世紀にクロニカを著したベルナベ・コボのように、アンデス住民の時間観念とヨーロッパの時間観念の違いに気づいたクロニスタもいたが、その彼もアンデスの時間観念を深く探ることなく、大半のクロニスタと同じように、アンデスの言説をヨーロッパ的価値観にもとづいて解釈し、ヨーロッパの言説に書き改めた^②。そのようなクロニカの記述にもとづいて、いわばヨーロッパ型の“インカ帝国像”が作り上げられることになったが、その過程で重要な役割を果たしたのが混血のクロニスタ、エル・インカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガが望郷の思いに駆られて書き綴った『インカ皇統記』*Comentarios Reales de los Incas* である^③。そして、16世紀から17世紀に著されたアンデス関係のクロニカがとくに19世紀後半以来、数多く公刊された結果^④、ヨーロッパ型の“インカ帝国像”は様々な修正を受けたものの、基本的には、今世紀後半にいたるまで、歴史的現実として受けとめられてきた。

とは言え、クロニカには必ずしもヨーロッパ的視点にもとづいて解釈された記述ばかりが書き綴られているわけではない。クロニカの随所に、ア

ンデスの言説がテキスト化されて収められているのである。もっともそれら土着の情報には、往々にして「作り話」とか「他愛のない話」という、クロニスタの価値判断が下されており、そのために、アンデスの言説は彼らの「未開性」の証左として取り上げられることがあっても、アンデス文化を解明する重要な手がかりとして、その価値が認められたことはなかった。もちろん、スペイン人の著したクロニカからアンデス文化を読み解く場合、クロニスタの情報源、情報を収集したときの歴史的背景や目的などを考慮に入れ、厳密な史料批判を行わなければならないのは言うまでもないが、クロニカに記されたアンデスの言説がきわめて重要な意味をもつことは否定できない。それは、かつて自ら「冷たい文書」と名付けた地方文書（巡察の記録、地誌報告書や教会文書など）にアンデスの歴史を読み解く重要な鍵を見出した F・ピースが近著でも指摘しているとおりである^⑤。

さて、アンデス関係の情報をクロニカに書き残した人たちの中には、フランシスコ・ロペス・デ・ゴマラのように、インディアス滞在の経験がまったくないスペイン人もいれば、ゴンサロ・フェルナンデス・デ・オビエドのように、インディアスには渡ったが、アンデスには足を踏み入れたことのない人物もいた^⑥。彼らはそれぞれ、直接もしくは間接に入手した情報や、すでに出版されたアンデス関係のクロニカに依拠しながら記述を進めた。その際、彼らが自己の価値判断や歴史観にもとづいて情報を取捨選択し、場合によっては、情報を操作したことは、ゴマラの作品が証明して余りあるところである。したがって、クロニカに記載された、未知な文化としてのアンデス文化の情報からアンデスの言説の意味を読み解こうとすれば、まず第一に、その情報源および情報の信憑性を問う作業が不可決なものとなる。その作業は実際にアンデス文化に触れた人たちが書き残したクロニカや地方文書、それに土着文書の綿密な分析だけではなく、考古学、民族学、文化人類学などの研究成果をも視野に入れて行わなければならないのは言うまでもない。そして、その作業を通じてはじめて、それぞれのクロニスタが伝えるアンデス情報の民族誌学的史料としての価値を評価し、ひいては、書き手であるクロニスタの異文化理解の方法を解明できると言えるだろう。

本稿で取り上げるバルトロメー・デ・ラス・カサスは、別の機会に明らかにしたように^⑦、ペルーへの渡航を目指しながら、その夢を果たせず、

生涯、アンデスに赴くことがなかった。しかし、彼は1550年代、ペルーにおけるエンコミエンダの売却（世襲化）をめぐるスペイン王室と激しく対立し、また、ビルカバンバに立てこもってスペインによるアンデス支配に執拗に抵抗したインカの「反乱」に大きな関心を抱き、晩年、ペルーをテーマに『財宝論』*De thesauris qui reperiuntur in sepulchris indorum*と『一二の疑問に答える』*Tratado de Doce Dudas*を著した。その二作品はとくに晩年のラス・カサスの政治思想を理解するうえで重要な論策であるが^⑧、そこにアンデス文化に対するラス・カサスの解釈を読み取るのはかなり難しい。しかし、同じころ、彼はインディアス問題に対する同時代人の無知蒙昧を糾すべく、インディアス文明をとくにギリシア・ローマなどの古代ヨーロッパ文明と比較し、前者の優秀性を該博な知識を駆使して論証する貴重な作品『インディアス文明誌』*Apologética Historia Sumaria*の編纂に従事していた^⑨。この『インディアス文明誌』は全267章からなる浩瀚な作品で、そのうち27章が主にアンデス文化の記述にあてられている^⑩。したがって、本稿では、『インディアス文明誌』の中からアンデス関係、とくにインカ国家にまつわる記述を選んで、ラス・カサスの伝える情報の民族誌学的資料としての価値を検討し、さらにそれらの記述に見られるラス・カサス独自の情報操作の意味を解明したい。そのためには、同時代に著されたアンデス関係の他のクロニカとの比較が不可欠になるが、今回は紙幅の関係から、『インディアス文明誌』の中から、数章を抜粋して翻訳紹介するにとどめたい^⑪。

(注)

① インカ双分王朝説は、セケ・システムを論拠にクスコの皇族組織を構造主義の立場から分析したトム・ソイデマが唱えて以来、インカ研究者の間で議論的になった。80年代、ピエール・デュビオルは地方文書など文献資料を駆使して、単一王朝説を批判して双分王朝説を支持し、現在では、二重双分王朝説を唱える学者もいる。もちろん双分王朝説を確証する文献史料は現存せず、また、たとえ双分王朝説を採用しても、解決しなければならない問題が残されるのも事実だが、少なくとも、インカ王朝を連続した単一王朝とみなすのはヨーロッパ的解釈の産物であるのは明らかである。この問題に関しては、以下の文献資料が参考になる。

Zuidema, R.T., *The Ceque System of Cuzco. The Social Organization of the Capital of the Inca*. Leiden.1964.

Duviols, Pierre, "Algunas reflexiones acerca de las tesis de la estructura dual

del poder incaico" *Histórica*. PUCP. Vol. IV. N.2. Diciembre-1980. Lima. pp.183-196.

Franklin Pease, G.Y., *Los Incas. Una introducción*. PUCP. Lima. 1992.

Rostworowski de Diez Canseco, María, *Estructuras andinas del poder. Ideología religiosa y política*. IEP. Lima. 1983.

Regalado de Hurtado, Liliana, *La sucesión inca. Aproximación al mando y poder entre los Incas a partir de la crónica de Betanzos*. PUCP. Lima. 1993.

② Cobo, Bernabé, *Historia del Nuevo Mundo*. [1653] Biblioteca de Autores Españoles Vol. XCII. Madrid. 1956. "Porque ni contaban por años sus edades ni la duración de sus hechos, ni tenían algún tiempo de punto señalado para medir por él los sucesos, como contamos nosotros desde el Nacimiento de Nuestro Señor Jesucristo, ni jamás hubo indio, ni apenas se halla hoy, que sepa los años que tiene, ni menos los que han pasado desde algún memorable acaecimiento acá. Lo que suelen responder cuando se les pregunta de cosas pasadas, como sean ya de más de cuatro o seis años, es que aquello acaeció *naupapacha*, que quiere decir antiguamente, y la misma respuesta dan a los sucesos de veinte años atrás que a los de ciento y de mil, salvo que cuando la cosa muy antigua, lo dan a entender con cierto tonillo y ponderación de palabras." (Lib.12. Cap. XXXVII. pp.142-143)

③ 邦訳『インカ皇統記』(牛島信明訳)岩波書店 大航海時代叢書第Ⅱ期エクストラシリーズⅠ・Ⅱ 1985-86年 もともと『インカ皇統記』は二部構成の作品で、翻訳されているのはインカ史を扱った第一部で、第二部はスペイン人によるペルー発見・征服史。ただし、第二部は著者の意図とは別に、*Historia / General del / Perú. / Trata el descubrimiento del / y como lo ganaron los Españoles. Las guerras civiles / que hubo entre Piçarros, y Almagros, sobre la partija / de la tierra, castigo y levantamiento de tiranos: y / otros sucesos particulares que en la Historia se contiene*. という書名で、著者の没した翌年、1617年にスペインのコルドバで上梓された。なお、『インカ皇統記』第一部は少なくとも、17世紀に英語版がロンドンで2篇(25年版は有名なサミュエル・パーチェスによるもの)、フランス語版が1篇、パリで出版され、18世紀には、フランス語版が5篇、ドイツ語版が1篇、さらに、19世紀には、英語版が2篇、フランス語版が1篇、それぞれ公刊されている(Inca Garcilaso de la Vega, *Comentarios Reales de los Incas*. Biblioteca de Clásicos del Perú 1. Lima. 1985. pp.435-441.)。

④ 19世紀から20世紀前半にかけて初版が刊行されたアンデス関係の主要なクロニカは以下のとおり。

Cieza de León, Pedro de, *La historia de los Incas o Segunda parte de la Crónica del Perú*. Madrid. 1873.

Betanzos, Juan Diez de, *Suma y narración de los Incas*. Madrid. 1880.

Molina, Cristóbal de, *Relación de las fábulas y ritos de los Incas*. London. 1873.

Sarmiento de Gamboa, Pedro, *Segunda parte de la Historia General llamada Indica*. Berlin. 1906.

Cabello de Balboa, Miguel, *Miscelánea Antártica*. Paris. 1840.

- Murúa, Martín de, *Origen e Historia de los Incas*. Lima. 1911.
 Cobo, Bernabé, *Historia del Nuevo Mundo*. Cuzco. 1890-93.
 Lizárraga, Reginaldo de, *Descripción breve de toda la tierra del Perú. Tucumán, Río de la Plata y Chile*. Lima. 1907.
 Matienzo, Juan de, *Gobierno del Perú*. Buenos Aires. 1910.
 同じく、先住民インディオの記した以下の二作品の初版が刊行されたのも19世紀末から20世紀前半のことである。
 Santacruz Pachacuti Yamqui Salcamaygua, Joan de, *Relación de Antigüedades deste Reyno del Pirú*. Madrid. 1879.
 Guaman Poma de Ayala, Felipe, *Nueva Crónica y Buen Gobierno*. Paris. 1936.
 しかし、これら土着資料は出版されても、欧米の学界では久しく、その歴史的史料としての価値が無視されつづけた。作品がアンデス文化を読み解くうえで貴重な価値を有する資料であることが明らかにされたのはごく最近のことである（参照：染田秀藤・友枝啓泰共著『アンデスの記録者ワマ・ポマ —インディオが描いた《真実》—』平凡社1992年）。
- ⑤ Franklin Pease G.Y., *Las Crónicas y los Andes*. PUCP. FCE. Lima. 1995. pp.350-351.
- ⑥ Gómara, Francisco López de, *Historia general de las Indias*. (参照：抜粋訳『拡がりゆく視圏』清水憲男訳 岩波書店「アンソロジー・新世界の挑戦3」1995年)
 Oviedo, Gonzalo Fernández de, *Historia natural y general de las Indias*. (参照：抜粋訳『カリブ海植民者の眼差し』染田秀藤・篠原愛人共訳 岩波書店「アンソロジー・新世界の挑戦4」1994年)
- ⑦ 拙著『ラス・カサス伝 —新世界征服の審問者—』岩波書店 1990年
- ⑧ 参照：拙稿“Testamento doctrinal de Bartolomé de Las Casas. Analisis sobre *De Thesauris*” JALAS (日本ラテンアメリカ学会会報) 第4号 1984年 90-118頁。
 拙稿「返還義務理論にみるラス・カサスの思想 ～『一二の疑問に答える』の分析～」特定研究成果『国際関係論の総合的研究』所収 大阪外国語大学 1985年 85-124頁。
- ⑨ この作品に関しては、ラス・カサス著『インディオは人間か』（染田秀藤訳 岩波書店「アンソロジー・新世界の挑戦8」1995年）の解説を参照されたい。
- ⑩ Caps.LVI-LVIII, LX, LXV, LXVIII, CXXVI, CXXXI-CXXXIII, CXL-CXLI, CLXXXII, CCXLVIII-CC LXI. 以上は、ラス・カサスがアンデス文明を主題に論じた章で、これ以外にも、アンデス関係の貴重な情報を挿入した章はいくつかある。それらに関しては、次の機会に論じたい。
- ⑪ Caps.CXXVI, CXXXI-CXXXIII, CXL, CLXXXII および Cap.CCLXII については、注⑧に記載の拙訳版に抜粋訳が収められているので、参照されたい。したがって、本稿では、第248章以降に収められているアンデス関係の情報を翻訳紹介する。翻訳の底本にしたのは、Las Casas, Fr.Bartolomé de, *Apologética Historia Sumaria*. Edición preparada por Edmundo O'Gorman. 2 tomos. UNAM. México. 1967. である。なお、翻訳にあたって省略した箇所は†印で示した。†印が文頭にある場合は〔前略〕、文中にある場合は〔中略〕、文末にある場合は〔後略〕を、それぞれ意味する。訳注は（ ），訳補は〔 〕の中にそれぞれ、記した。また、章の番号は筆者が独自につけたもので、底本の該当章はその後括弧の中に漢数字で示した。各章冒頭の要旨は、底本の編者オゴルマンが付した見出しを訳出したものである。

【史料翻訳】

I-1 (二四八) ペルー王国における統治と習慣に関する報告が始まる

ペルーの人々が異教を奉じていた時代、ならびに、スペイン人たちが初めてペルーの地へ足を踏み入れ、彼らを発見したころ、ペルーの王国がどのように治められていたのか、まずその報告からはじめたい。

報告をはじめるにあたって、是非知っておかなければならないことがある。つまり、スペイン人はそれらの王国をひとまとめにしてペルーと呼び、名付けているが、このペルーという言葉、名称を、インディオたちがまったく知らなかったわけではないということである。すなわち、スペイン人が植民し、サント・ミゲルと呼んだ最初の居留地は、インディオがピウラーと一最後の音節を長く発音して一呼んでいた谷に位置していたため、スペイン人はその広大な土地や王国をひとまとめにしてペルーと呼ぶようになったのである。わたしたちスペイン人がペルーという名称で理解している土地、王国はキット地方、つまり、スペイン人が建設し、サント・フランシスコと名付けた居留地が位置し、また、スペイン人がパストと呼んでいた地方やその管轄領域と接する地方から、ラ・プラタの居留地とその管轄領域までに跨る全域である。距離にすれば、全長、700レグワ以上、幅は最大で110ないし115レグワ、最も狭いところでも、50レグワ以上あるだろう。それが、わたしたちスペイン人がペルーと呼ぶ土地である。さて名称のことを話題にしたので、ついでにここで、ペルーの人たちは各地方のみならず、各村にまで、さらには、全土に位置する丘や谷、土地の隅々に至るまで、一つ残らず、名称をつけていたこと、そして、それは、彼らが立派な文明的な秩序を整えていたことの紛れもない証拠でもあると言っておこう。

ペルーの人々が行っていた統治の種類について言えば、それはそもそも当初から王による統治であり、一人の人物が治めていたことを知るべきである。王制は、先にくりかえし記したように、最も高貴にして自然なものである。ペルーの王制には、二つの時代、つまり、二つの様式があった。一つは、初期に行われた統治で、修道士たちが究明したところでは、500年ないし600年にいたるまでつづいたらしい。その間ずっと、ペルーの国の人々は数多くの王や首長^{セニョール}に治められていた。その王や首長たちは民衆にごく近い親族か、家長のような存在だった。推測されるところでは、彼らは全員、元を質せば、王たちと出自は変わらなかった。王や首長の管轄権や権力は村の領域を越えるものではなかった。村には、大きな村もあれば、寒村もあった。民衆はみな、王や首長を大いに敬い、心からかしづいていた。一方、王たちは民衆を実の子供のように遇し、愛していた。人々は互いに害を加えたり、不正を働いたりしないよう、とくに、窃盗を働いたり、女性に暴力を揮ったり、姦通したりしないよう、厳しい監視の目を光らせていた。そのような統治は、アリストテレスが『政治学』の冒頭近くに記しているように、ごく

自然なものである。

ペルーの人々は最初はそのように、互いにまったく争うこともなく、村ごとに平和に暮らし、誰もが自分の持っているものに満足していた。その後、とくに水利資源や土地や領域をめぐる、村と村の間で軋轢や反目がいくらか生じた—と言うのも、人間というものは、いかに本性素朴で、善良であっても、悪魔がわたしたちと初めて諍いをはじめて以来、数が増え、大勢になりだすと、どうしても時として睚眦合いを避けることができなくなるものだからである—。その結果、人々はできるだけ高い丘や岩山に村を築くようになり、難渋してそこへ食糧や飲み物を運んだ。そして、すでに記したように、その場所に、切り出した石で実に頑強な砦を築き、防御に備えた。

彼らの主要な武器は投石器^{オシダ}だった。彼らは石から身を守る盾のようなもの以外、矢や弓は持っていなかった。これは山岳地方に住む人々の場合である。しかし、インディオたちがユンガと呼んでいた海岸部の平野に住む人々について言えば、中には、矢を武器に戦うものもいた。もっとも、それには毒草の汁は塗られていなかった。また、地方によっては、鏃の代わりにヤシの木や骨を削って先をとがらせたものをオオウイキョウでこしらえた投げ槍につけて戦うものもいた。彼らはその槍を革ひもをつけて投げつけた。彼らは実に巧みに、また、正確に槍を投げた。海岸部の平野や谷間のあたりでは、王たちは丘の上に館を構え、もし適当な丘がなければ、土をたくさん盛り上げて、人工的に丘を築いた。

先に記したように、ペルーと呼ばれる土地ではどこにも、パナマの方向、その入り口にあたるごく限られた地域を除き、人肉を喰する人々はひとりもいなかった。その土地一帯に住む人々はいつも人肉を喰することを忌まわしいこと、自然に背く唾棄すべき陋習と考えていた。ただし、例えばプエルト・ビエホのように、海岸部の一部の地域では、話は別である。そこでは、全員ではないにせよ、一部に人肉を喰する人々がいた。しかし、だからと言って、それが彼らの間で恥ずべきことだと見なされていなかったわけではない。密林地帯^{モンターニャ}に住む人々の中には、裸で暮らしている人々も一部にいたが、それ以外の地域ではどこでも、人々は皆、衣服をまとっていた。

地位や領地を継承する際の慣習や掟について言えば、首長は年老いて、寿命もしくは病気で死期が近いと悟ると、村を治め、人々に善をもたらすのにふさわしいと判断した息子に白羽の矢をあてた。もしすでに成人し、統治能力を備えた息子がいなければ、首長は実の兄弟の一人、あるいは、兄弟がいなければ、最も近い親族を「継承者と」考えた。最終的に、親族もいなければ、別の人物が任命された。その場合、首長は候補者とみなされた大勢の人の中から、村のために治め、働く賢慮を十分に備え、しかも〔選ばれた場合〕自分に感謝する気持

ちを抱くような人物を選んだ。そうして、首長は心の中でそのような人物を選び、首長になるのにふさわしい人物であると認めると、[その力を] 試すために、彼に統治に関わることを任せた。つまり、首長はその後継者に、いくつかの任務を与えて送り出し、自分の下したいくつかの命令の実行を人々に命じさせた。それは一つには、人々が彼を、その土地を支配する継承者であること、つまり、村の王もしくは首長となるべき人間であることを認め、彼との交わりをはじめ、そして好意を抱くようになるのを願ってのことだった。いま一つには、その人物が任務を果たし、人々のことを理解し、実際に素晴らしい統治を行って、人々から人望を集めることを目的としていた。つまり、そうすれば、彼は、たとえ道を誤っても、まだそれを正し、矯正する首長の目の黒い中に支配や統治の方法を身につけることになると考えられたのである。

理解したかぎりでは、それがペルー、さらにはインディアス全域で、広く行われていた確かな規則、慣習だった。たとえ首長の実子であっても、年少者には決して統治は任されなかった。同じく、正しく統治することができず、人々に権力を振りかざすような人にも、決して統治は任されなかった。結局のところ、そのころ、領土の継承は、首長が必ず国を正しく、また、国のために思って治めてくれると判断し、評価した人物を選ぶことで決定され、世襲によるものではなかった。つまり、もし首長に子供あるいは近しい親族がいて、彼が先に述べたような人物であれば、他の人より優先され[て領土を継承し]た。それは適切な方法だったと考えられる。一つには、人間は自分の子供や近しい人たちに自然な愛情を抱くものだからであり、いま一つには、先代の首長に近ければ近いほど、人々はその人物にいつそうの敬意を表し、尊敬と親愛の情をもつことになるからである。ユンガたちが住む、タリヤナスと呼ばれる一部の地方や、クアカビルカの一部には、男性ではなく、女性が継承する習しを守っていた人たちがいた。その女の首長はカプリヤナと呼ばれていた。ユンガとは、海岸部の平野に住む人々のことである。

I—2 (二四九) 引きつづき、ペルーの人々が昔行っていた統治と習慣について記す。すなわち、彼らが土地を耕すことに示した熱意、灌漑用水路、最初の時代に首長たちに納めていた租税、結婚、葬儀、その他、特筆すべき数多くの祭儀について取り上げる。

ペルーの人々は、彼らがチャカラと呼んでいる畑を秩序正しく細心の注意を払って耕し、あらゆる種類の食用作物を栽培していた。つまり、彼らは真に見事に畑を耕し、作物を栽培していた。同じく、彼らはまた、土地を灌漑するのに素晴らしい技能を発揮し、実に巧みに川から水を引いていた。まず小高い丘や山地に

見事な技術を駆使して大きな水路を建設したが、そのように、^{ケブラダ}峡谷や山の頂上から取水するのは不可能に近い。彼らは取水源から三ないし四レグワ、もしくは、それ以上離れたところから用水路を建設し、その後、大きな用水路から畑へ水を引くために、別に小さな用水路をいくつも築いた。彼らはそうして用水路を建設したり、全員がもれなく利用できるよう、水を分配するのに、実に細やかで素晴らしい取り決めをしていた。水は一滴たりとも、無駄にされなかったのである。

当時、人々が首長に納めていた租税とは、全員が力を合わせて首長の館を建てたり、首長の畑に種を蒔いたり、しかるべき時期が来ると、取り入れをしたりすることだった。またそれ以外にも、彼らは共同で公共の事業に携わった。したがって、人々が王や首長たちに納めていた租税は実に些細なものだった。ときには、果物やそれに類したもの、つまり、数種類の食料を僅かではあるが、差し出すこともあった。村の人々が力を合わせて、首長もしくは^{レプブリカ}国のためになるような仕事をするとき、首長が彼らに食料を提供した。

ペルーの人々は結婚に関しても立派な掟を守っていた。誰一人、実の姉妹、従姉妹、叔母や姪、つまり、父親を同じくする実の兄弟姉妹の娘とは結婚しなかった。そのような醜悪な行為は大罪と見なされた。と言うのも、彼らが姉妹や母、子供と呼んでいたのは実際にそうした人たちだけでなく、実は従兄弟(従姉妹)を兄弟(姉妹)、叔父(叔母)を父(母)、甥(姪)を息子(娘)と、それぞれ呼んでいたからである。結婚は常に身分の等しいもの同士で行われた。つまり、首長[一族]は首長[一族]と、平民は平民とそれぞれ、結婚した。彼らは二十歳になってから結婚した。

彼らは実に気前が良かった。彼らはまるで真の隣人愛にもとづく行為を当然のように実行し、自分たちの食べ物をすべて、他人と分け合って食べた。そして、食べ物を分かち合うというこの態度は目を見張るほどで、インディアス全域でも、ごく普通に一般に行われていた—その件については、これまで何度となく目にしたので、[ペルー以外の]他の人々に関しても、確かな証拠を示すことができる—。つまり、彼らは食事の際、いかに食べる物が僅かしかなくても、そこへ他人がやってくると、たとえ大人数であっても、その食べ物をすべて、分かち合い、全員で賞味する。たとえ一人に当たる分量が僅か爪ほどになっても、彼らは、受け取ろうとしない人がいれば、無理にでも、受け取らせたほどである。

ペルーの人々は埋葬、墓、死者に対して細かい心配りをした。その点で、彼らは実に宗教心に篤く、遺体は布にくるんで保管した。ユンガたち、つまり、海岸部の平野に住む人々は砂原の砂を掘って巨大な墓や穴を作り、その中に死者を埋葬した。その穴は一辺の長さが15ないし20ピエ、深さが2エスタードの四角形の

小さな池のようなものだった。穴の大きさは埋葬される人の身分によって異なり、大きなものもあれば、小さなものもあった。内部に目をやると、四方の壁面には、それぞれ、大の大人なら、4、5人が入れるほど大きな、そして、高さが一人前の人間の背丈ほどもある丸天井の部屋が作られていた。そこには、小さな狭い扉がついていた。丸天井の部屋の中に、首長と彼がこよなく愛した人たちが数名、それに、墓に入って首長に仕えることになった召使いが数人、埋葬された。とは言え、その数は、ヌエバ・エスパーニャに触れたときに記したほど、多くなかった。その人たちは首長の遺体の周囲に埋められ、また、そこには、首長が生前愛用した装身具や杯や宝石も一つ残らず、副葬された。それから、その小さな扉を泥あるいは日干し煉瓦で塞いだ。そうすると、そこにはまるでいっさい物影がないように見えた。残りの三つの部屋、丸天井の小部屋にも、同様の処置を施した。そこには、子供や子孫が埋葬されることになっていた。それから、その穴、つまり、先に四角形の小さな池のようだと記した穴をすっぽりと砂で覆い、地面を均した。

首長は生前同様死後も、側近の人たちにかしづかれた。つまり、彼らは墓前に食物や飲み物を供え、やがてその場で、それに火を放った。首長の死を悼んで参詣にやってくる人たちはこぞって、食物や飲み物をたくさん持ってきた。首長の遺体をくるんだ布を新しく換え、首長が生前所有した家畜の一部を墓前に連れてきて、焼いた。そのようにして、彼らは生前習わしとしていたように、死後も、首長のために様々なことをして仕えたのである。と言うのも、彼らは、首長の靈魂は現世になくとも、別世界で生きていると信じていたからである。人々は首長をこの上なく尊敬し、崇め、愛し、畏れていた。その思いは長い星霜を重ねると、ますます募り、ついには、偶像崇拜と化し、定着した。つまり、首長の中に、立派で、人々の役に立ち、また、人々からこよなく愛された人がいると、しばしば、時の経過とともに、その首長に対する愛情と崇敬が次第に強まり、ついには、その首長は彼らから神々と崇められた。そして、困難な状況に直面すると、人々はまるで神々にすがるように、首長の墓へ詣で、供物や犠牲や祈りを捧げるようになった。このようにして、人間を神々とみなすような考えが生まれ、それが高じて、次第にこの世に偶像崇拜が少しずつ広がっていった。それは『知恵の書』第14章に明らかなとおりで、そこには、偶像崇拜が生れる原因がいくつか記されている。ペルーの人たちは人間を神々に仕立て上げて道を誤り、そのため神々に供物や犠牲を捧げ、偶像にも衣装、トウモロコシ、酒、羽根、羊(リヤマ)、金銀、その他、貴重品を捧げるようになった。それでも、昔、彼らが人間を犠牲に捧げようと考えたことや想像したことはなかった。

彼らは墓の上に、同じ大きさの囲いや天蓋のない小屋をいくつか建てた。そして、そこにごく普通の食事を供え、まるで「カトリックの」代祷のように、羊、

獣脂や兎などを焼いた。彼らの信じるところでは、それで、靈魂は慰められたからである。故人の妻たちは泣きながら畑や、夫と最も頻繁に言葉を交わしあった場所を歩き回った。地方によっては、彼女たちが手に杖を携えていたところもあった。妻たちは喪に服するため、髪を刈り上げ、頭の上に大きな布を被せていた。彼女たちは少なくとも一年間、喪に服したが、中には、生涯、喪に服すものも大勢いた。

Ⅱ—1 (二五〇) パチャクティの治世にインカの体制が確立した。

先の2章に記したのはすべからく、昔、ペルーの王国に数多くの王が君臨し、彼らがそれぞれの国を治めていた最初の、そして、最も古い時代にまつわる話である。引きつづき、本章から、第二の時代、つまり、500ないし600年つづいた最初の良き時代の後のことについて触れるべきだろう。この第二の時代には、インガと呼ばれた歴代の王が統治した期間がすべて含まれる。インガの支配と統治は、わたしたちスペイン人キリスト教徒が渡来するまでつづいた。インガの支配がどれくらい、また、何年つづいたかに関して、わたしはこれまで耳にしたことがない。ペルーの人たちの言葉に精通したスペイン人聖職者たちの話によると、彼らは情報を口づてに伝え聞いたこの上ない故老の賢人たちが語る話や、代々詠い継がれてきた彼らの詩歌を頼りに、昔の出来事を懸命に調査し、究明できたい。それと言うのも、ここインディアスのすべての人々と同じように、ペルーの人たちにも、文字で記された記録がなかったからである。[スペイン人の中には]一部に、ペルーの人々は文字をもたず、知らないために、一貫性を欠いた、曖昧で途切れ途切れの話をするので、彼らの話には必ず、少し、いや、かなり誤りがあると記している者もいるが、わたしは彼らのそのような意見など意に介さず、理解するかぎり、最も真実に近いと思われる話を以下に記すことにする。

インガ王の起源を記すにあたり、まず初めに、インディオたちが話しているところある伝説に触れておきたい。その伝説は一部、神話の可能性もあるが、実際の出来事にもとづいている可能性もある。そのように、神話と史実を混合するのは昔の人々ではよくあることである。

とりたてて言うまでもなく、ピラコチャ・インガは、少なくとも予想だにしないことなので、実の息子(パチャクティ)が[グアマンガアラカとアルコスグアラカの二人の首長に率いられたアングガイラスの人々相手の戦いに]勝利を収め、幸運が巡ってきたと知ると、たいそうな喜びようだった。時を移さず、ピラコチャ・インガは妻子や一族郎党を引き連れて急ぎクスコの町へ戻った。そして、クスコでは、盛大な宴や厳かな祭事が仰々しく執り行われた。老翁(ピラコチャ・インガ)は、息子パチャクティが思慮深く、気概に富み、勇敢な人物で、

太陽神をことのほか篤く崇拝していることを知り、それまで治めていた王国や土地、それに、すすんで自分に恭順を誓ってきた地方を一つ残らず、譲る決意を固めた。息子（パチャクティ）は父親の退位を受け入れ、王国の統治をはじめた。彼はまるで齢七〇の老人のように、実に思慮深く、威厳と重々しさと権威をもって国を治め、誰からも愛され、慕われた。と言うのも、彼が着手し、実行した統治は、どの臣下にとっても、実に崇高かつ公正、幸福かつ有益なものだったからである。したがって、彼はパチャクティと名づけられるのにふさわしい人物だった。パチャクティとは、「世界の変革」という意味である。つまり、彼がすべての王国や地方を治めだすと、世の中は改まり、過去に見られなかった栄光や幸福がもたらされたので、臣下たちには、世界が変転したように、すなわち、世界が変わり、新しくなったか、別の新しい世界が現れたように思えたのである。かつて彼は「世界の変革」を意味するパチャクティ・インガ・ユパンギを名乗ったが、その目を見張るような偉業、すなわち、キリスト教徒の間であれば、奇跡と見なされてもおかしくない偉業を達成したことで、さらに別の名前が一つ、付け加えられた。すなわち、パチャクティ・カパク・インガ・ユパンギとなったのである。それは「世界を覆し、変革した王。人々に愛され、崇められるにふさわしい王」という意味である。

パチャクティ王の名声はその世界一帯に広まり、したがって、まるでシバの女王が第二のソロモンを訪れるように、はるか遠くの地方から、大勢の首長たちがパチャクティのもとへ詣で、恭順の意を表し、数々の贈り物や進物を携えて表敬した。

Ⅱ－２（二五一）パチャクティの治世に起きた記憶すべき出来事と帝国の組織

↑以上のことから、このパチャクティ・カパク・インガ・ユパンギ王が少なくともその生涯をかけて行った支配、統治、および、領土の拡大がローマ人のそれよりもはるかに公正で、私利私欲を離れたものであったのは明らかである。と言うのも、わたしたちが真実、理解できたところでは、パチャクティ王が王国を受け継ぐ時代まで、歴代のインガ王が不正な戦いを仕掛けて王国を拡大したことなどなかったからである。

話をパチャクティ王が就いた王位の素晴らしさ、王が治めた広大な帝国や王が行った穏やかで素晴らしい統治に戻すと、まず王が父の譲位により王国を継承して最初に着手したことは、宗教に関わる事柄を整え、定めることだった。それは、最高にして思慮深く敬虔な君主にふさわしい仕事だった。なぜなら、統治を行うにあたり、何をおいてもまず、神に関わる事柄からはじめなければ、心の安らぎと幸福を得ることができないからであり、神事は最善のことだからである。君主

は真の宗教に帰依して、あらゆる関心事の中で、宗教にまつわる事柄に目を配れば、俗的かつ霊的な幸福を十分に確信することができるものである。カトリック教を奉じる国王や皇帝にとり、神に関わる事柄においてとるべき態度や、至高の地位へ自分を高めてくださった方〔神〕に捧げる感謝の気持ちについて、この異教を奉じる君主がただ自然の光に導かれて示した例は模範となりうる稀有なものだった。つまり、その君主は太陽に心から深く感謝していたのである。と言うのも、彼の誤った考えによれば、素晴らしい勝利を手に入れることができたのはひとえに太陽の庇護のおかげであり、その勝利によって、若くして王の地位へ上りつめたからだだった。

神事や宗教に関わる精神的な事柄を万端、整えると、この善良にしてこの上なく賢慮を備えた王は、王国を治め、公共の善を達成するのに必要なことを命じ、立派にして一真の神への信仰心がなくとも、可能なかぎり一完璧な新しい^{ポリシープ}国制を確立して、配下の国々を例外なく、美しく洗練されたものに仕上げるのに一意専心した。パチャクティ王は王者の都クスコにその国制を整えることに着手した。それは、支配下の町や村にいて王に服従を誓っていた首長をはじめ、王が自分の身代わりとして地方や重要な町に配置した司政官が一人残らず、クスコを模範にそれぞれの国を整え、磨き上げ、治めるべき方法を学ぶようにと願ってのことだった。さらに、パチャクティ王はすべての人民の信望を勝ち取るために、また、自分の下す決定に権威をもたせるため、次のような策を講じた。つまり、自ら、太陽の御子と名乗った。すなわち、王は以前から、「唯一の支配者」という意味のカパインガを自称していたが、さらに別の肩書きを付け加えたのである。王はその肩書きをことのほか素晴らしいものと見なし、なによりも誇らしく思った。それは「太陽の御子」を意味するインディチュリという肩書である。そうして、王は、太陽には自分以外に息子がおらず、自分には、太陽をおいて他に父親はいないと告げた。したがって、パチャクティ王はことを行ったり命じたりするたびに、それは、太陽が行い、命じ、指図していることだと語った。

人民から権威を獲得するためにとったこの方法は第二代のローマ王ヌマ・ポンピリウスのやり方に類似している。ヌマ王は偽って妖精エゲリアを妻のように見せかけ、夜になるとエゲリアと話をしたり、言葉を交わし、そして、彼女の意見にしたがって世俗の統治および宗教に関する法律を定めたという。もっとも、ヌマ王の手口に比べると、太陽の御子を自称したパチャクティ王のやり方の方がはるかに誠実である。このヌマ王の偽装工作については、オウィディウスが『変身物語』第15巻や『祭事暦』第3巻に記している。

この件について、この〔パチャクティ〕王が最初に着手したのは、すでに人口稠密な町になっていたクスコ市全体を二つの地区、部分、もしくは集団に分ける

ことだった。王はその一方の最も有力な地区をアナン・クスコと名付けた。それは「クスコの上の部分、地区、集団」という意味である。残りをルリン・クスコと呼び、それは「クスコの下の部分、地区」という意味である。王は中心となるアナン・クスコという地区、部分をさらに5つの地区もしくは部分に細分した。そのうちの中心となる地区をカパク・アイリョと名付けたが、それは「王家の一族」という意味である。このカパク・アイリョのもとに、王はその集団に属する町の大勢の人を集めた。王は二番目の地区をイニャカ・パナカ、三番目をスクソパナカ、四番目をアウカ・イリ・パナカ、五番目をビカキラウ・パナカと、それぞれ名付けた。王はそれぞれに、大勢の人を指定し、そうして、町全体をいくつかの集団に分けた。王は最年長の息子を第一番目の地区、つまり、集団の指揮官とし、彼に王国を継承させた。二番目と三番目の地区の指揮官には、王は実の父とその傍系の子孫を指名し、四番目の地区の指揮官には、祖父と、同じくその傍系の子孫を、五番目の地区の指揮官には、曾祖父とその傍系〔の子孫〕を、それぞれ任命した。

同じように、王はクスコの下の地区を意味するルリン・クスコと名付けた、その町の二番目の有力な地区、集団も5つの部分もしくは一族に細分した。その一番目をウスカマイタと名付け、初代インガ王の次男の子孫をその指揮官に指名した。二番目をアポマイタと呼び、第二代インガ王の次男とその子孫を指揮官とした。三番目の一族、つまり、集団をアグアイニと名付け、第三代インガ王の次男とその子孫を指揮官に任命した。四番目をラウラウパナカと呼び、その指揮権を第四代インガ王の次男とその子孫に任せた。五番目の地区をチマパナカと名付け、第五代インガの次男とその子孫を指揮官にした。

Ⅱ-3 (二五二) 前章の話のつづき

このパチャクティ王はそれとは別に、^{ポリシーア}国制や国を完全なものに仕上げるために、注目すべき施策を実行に移した。つまり、王は主に住まいとしていたクスコの町に隣接する土地や地方を自らくまなく巡察したのである。そして、その巡察のおり、王は各地方や村の地勢、その領域と住民について調査し、検討した。もし特定の専門職人が不在で、その職人を必要とする村があり、その村に彼らを受け入れる準備が整っていると判断すると、王はそのような職人が大勢住んでいる別の村から、適当と思われる職人を選び、妻子や家族ともども、彼らを必要としている村へ行って暮らすよう命令した。もっとも、王はその職人たちがもともと住んでいた村に害が及ばないように心を配った。また、その際、王は、その職人たちのために、[新しい村に] 田畑や敷地を分け与え、家を建て、以前の村と同じように、仕事ができるよう手筈を整えた。ときには、村々の間で、職人たちが交換され、

入れ替わることもあった。例えば、もし、銀細工師はあり余るほどいるが、農夫に不足している村があると、銀細工師たちは別の村へ移り、その代わり、彼らが移り住んだ村に、村の生活を支えるのに必要な農夫が余っていれば、その村の農夫たちが銀細工師たちの出身地である村へ移り住んだ。このようにして、王は土地と家を取り換えさせたが、もし各々の土地や家の価値が異なる場合、他のことで、その埋め合わせをした。

パチャクティ王は領土巡察のおり、まったく、もしくは、ほとんど実を結ばない種や樹木、果樹があると、他の場所で栽培できないかどうか検討し、必要とあらば、種の蒔き方や栽培方法を知っている人々を他の土地から連れてきて、その土地の住民にその技術を教えさせた。そして、王は教えに来た人たちのために、報酬の授与と、家や畑がもてるよう土地や敷地の分与を命じた。パチャクティ王は人民の気質や性格を知ることには注意を払った。もし自尊心が強い、落ち着きのない人たちだと判断すると、王は他の人々、とりわけ、知り合って久しく、経験から忠実かつ従順で、性格がよく、誠実であることを熟知している人々[の一部]を彼らのもとへ移住させ、そして、その人たちのところで暮らし、もとの土地で行っていた職業や仕事に従事するよう命じた。それは、その[自尊心の強い]土着の人たちが平和に暮らすことを学び、そして、そのために王がわざわざ忠臣たちを彼らのところに住ませたことを理解して、新しくことを企てるのに鬼胎を抱くのを願ってのことだった。それはさながら[なにか事を起こせば]すぐに支配者に密告する間諜や証人を内部に抱えているようなものだった。したがって、その目的は、その村で、不穏な動きが起こるのを未然に防ぐことにある。

パチャクティ王は王国中で最も勇ましく好戦的な人々を選んで、妻子や家族を引き連れて帝国の境界地方や国境いへ移住させ、彼らにその土地に住み着き、土地を切り開き、田畑を耕すよう命じた。その際、王は、彼らが喜んでその命令に従うのを願って、様々な特権や免除を与えた。また、パチャクティ王は彼らに、自衛のために、また、近隣モンターニャの村や地方を守るために、砦を築くように命じた。この命令は主に密林地帯に住む人々との境界地方で実行された。と言うのも、密林地帯に住む人々が御しがたく、しばしば、平和に暮らしている人たちを襲って、不安に陥れ、害を加えていたからである。パチャクティ王は、自らの治める帝国内に不穏な分子がいるのに気づくと、彼らをその地方から引き離し、他の地方に土地を与え、不穏な動きをしたり、決起したりする口実を与えないようにした。その際、王は常に、移住地の気候がもともと住んでいた地方の気候と異なるよう配慮した。そのように、王が配置した人々や、他の地方へ移住させた人々はミティマエスと呼ばれた。ミティマエスはそれぞれの衣装や衣服だけでなく、言葉もそのまま保持するのを許された。と言うのも、王が各自に、出身の村の言葉

を学ぶよう命じていたからである。王はミティマエスを移住地を治める首長もしくは司政官の管轄下に置いた。王はまた、ある土地から別の土地へ移住した住民の行き先が彼らが連れ出された元の土地の気候や地勢と同じか、似通った土地であるよう、ことのほか心を配った。なぜなら、インディオは酷熱の土地から寒冷地へ、あるいは逆に、寒冷地から酷熱の土地へ、つまり、気候や地勢などの点で、大きく異なる土地へ移住させられると、大半が死に絶えてしまうからであり、それはインディアス全域を通じて認められる傾向だった。

パチャクティ王はこの上ない賢慮を具えた君主として、すべての臣下の数、すなわち、年老いた男女、壮丁、青年、少年少女、四歳以下の幼児、生まれたばかりの赤ん坊の数を記録にとどめるに一方ならない努力を払った。青年と少年少女にかぎっては、四歳から十歳、十歳から十八歳、十八歳から二五歳に区別され、十八歳から二五歳の年齢に達すると、結婚が命じられた。パチャクティ王はこのことにたいそう心を配ったので、王国中には、老若を問わず、自分の年齢を数えられない、また、自分の出身地や村について知らない者は一人もいなかった。

Ⅱ－４（二五三）パチャクティの治世に築かれた王道と石畳道

この実に賢慮を備えた、そして、明らかに世界中でその名を知られ、称えられてしかるべき君主パチャクティはそれとは別に、不朽の賛辞を呈して称えられ、賞賛されて当然なことを実行に移した。それは、彼の治める王国内を走る二つの街道（インカ王道）に関することである。その二つの街道は、スペイン人が実際にその目で見なければ、夢を見ているように思えるほどのものであり、誰もがまるで異口同音に、褒めたたえ、賞賛しても賞賛しつくせないほど立派なものである。それらもまた、ペルーの人たちがすべからず、理性にもとづいた生き生きとした鋭い、そして、素晴らしい判断力を行使したことを証明してあまりある。と言うのも、彼らはその街道を自らの手で建設したからである。

パチャクティ王は、自らの治める王国や領土の津々浦々へ通じる街道を二本、建設するよう命じた。その二本の街道はキト地方の北に位置するパスト近郊からチャルカスまで通じ、少なくとも距離は800レグワあり、さらに、街道はチリ地方にまで達していた。スペイン人たちが一様に断言し、主張しているところによると、その街道は全長、1000レグワを越えるらしい。

二本の街道のうち一本は、ユンガと呼ばれる人たちや住民が暮らしている海岸部の平野に位置する土地や地方を縦断していた。いま一つの街道は山岳地帯や高地を走り、いずれも素晴らしいものだったが、とくに山岳地帯を走る街道は見事なもので、他に例を見ないほどだった。思慮深く学識のある修道士たちの話によれば、それらの街道は素晴らしく、見事なものであり、分別を弁えた世間一般の

人たちも、街道の建設の面で、ペルーの人々がローマ人をはじめ [世界の] どの人々にも引けを取らなかったのを認めている。

Ⅱ-5 (二五五) インカの権威と威厳。貴族の子息に対する教育。統治に関わるいくつかの定めについて

このパチャクティ王ならびにその後継者たちが示し、手にした権威や威厳は絶大なものだった。したがって、王に従っていたすべての首長たちをはじめ、その臣下たちや王国中の人民も一人残らず、王をこの上なく崇拜し、心から王にかしづき、思いを寄せていた。どの首長も支配者も、たとえどれほど偉大にして豊かで、権勢を誇っていても、オホタと呼ばれる草履を脱がずにインガ王の御前に進み出ることも、姿を現すこともかなわなかった。また、なにか軽い荷物を背負っている場合、インガ王の居場所の入り口へ達するまでに、その荷を肩から下ろした。同様に、首長は誰であれ、とくに命令が下らないかぎり、インガの御前で、エスパニョーラ島の人々がドゥーオスと呼んだ、床に据えられた背の低い椅子に腰を下ろすこともできなかった。もし腰を下ろすことがあれば、彼らは床に座した。首長は、インガ王から椅子を授かり、座ることが許された場合を除き、自分の館であれどこであれ、椅子を据えることはできなかった。

このパチャクティ王は一度でも蜂起したことのある人々に対しては、武器をいっさい携帯させなかった。そして彼らはずっと、衆人から見下され、非難された。そして、これは確かなことだが、ペルーの王国に生まれた首長や有力者は例外なく、その息子たちがクスコの言葉を学ぶことと、インガ王ならびに上位の者に仕え、かしづき、この上なく忠実であるために身につけなければならない方法を修得することに、つとめて心がけた。また、クスコの言葉を知らないか、自由に操ることができない者には、その理由から、決して支配権は授けられなかった。今ではもう、そうした首長も数名しか存在しない。と言うのも、スペイン人がペルーの土地へ足を踏み入れて以来、何もかもが消滅し、乱れてしまったからである。そして、その首長たちは実の息子に、スペインの言葉を熱心に学ぶよう命じ、[インガの時代と] 同じ理由から、いかにキリスト教徒にかしづき、仕えるべきかを教え込んでいた。それは元を質せば、このパチャクティ・インガ王の時代の賞賛すべき習慣のおかげだった。すでに記したように、一般のスペイン人自身がそう証言しているのである。

パチャクティ王はまた、帝国全土にいる支配者、首長、有力者全員により広く用いられる言葉として、クスコの町の言葉（ケチュア語）を話すよう命じた。と言うのも、王の主張するところでは、そうすれば、意志の疎通が良くなり、地方同士で意志が疎通すれば、互いに親近感が生まれ、その結果、永遠に平和がつづ

くからであり、また、自分と交渉するために、はるか遠方の土地からやってくる人たちもわざわざ通訳を必要としなくてすむからだった。

人々は全員、床に敷いた蓐蓐の上に座って食事を取った。様々な料理が出されたが、大半の料理には、緑か赤いアヒー、つまり、唐辛子が使われた。料理の量はほんの僅かにすぎなかった。つまり、彼らが食事のために用意するものはすべからく、ほとんど無きに等しかった。誰一人、食事をしている人たちが他人の料理に手をつけないよう見張る必要はなかった。なぜなら、すでに記したように、この世には、彼らのように、持っているものを持たざる者と分かち合う人たちはいないからである。彼らはわたしたちキリスト教徒のことを悪人だと言う。なぜなら、わたしたちは自分たちだけで食事を取り、誰も招かないからである。また、彼らは、わたしたちが口先だけで招きあっているとって、あざ笑っている。と言うのも、彼らは言葉ではなく、本気で実際に他人を食事に招待するからである。彼らは、たとえトウモロコシが一粒しかなくても、まったく素直な気持ちから、その一粒を目の前にいる人たちと分かち合う。彼らは、他人が僅かししか持っていないのを見ると、たとえ受け取るのを拒んでも、本心から、無理やりにでも、それを受け取らせるほどである。

Ⅱ－6（二五六）ペルーの帝国の階級制度・戦争

↑通常、この〔パチャクティ〕王や王の後継者が戦争を行ったのは、支配下の地方が異邦人から害を受け、侮辱されたと不平を訴えてきたり、あるいは、王に従っていた支配者もしくは地方が反旗を翻したときである。あるいは、おそらくときには、王の一部の後継者が領地を広げるための口実を求めて戦いを行ったこともあった。領土の拡大については、過去の数多くの国にその実例がある。中でもとくに、ローマ人がその格好の例である。神よ、願わくば、今日、キリスト教徒を自称しているわたしたちの間で、状況がこれ以上悪くなりませんように。

戦いが避けられない場合、王はなにをおいてもまず、最大の武器である棍棒^{ボッラ}を一本、持たせて使者を派遣するか、武将に数名の部下をつけて敵のもとへ送るか、いずれかの方法を選んだ。その棍棒には、王の印がくっきりとつけられており、それは、訓諭と脅迫のしるしだった。その棍棒を携えた使者はそのおかげで、まるで彼自身が王のように、迎えられ、かしづかれ、敬意を受け、崇められた。もしそうでなければ、必ず報復が行われた。

王は軍備を整える決定を下すと、相手の王、つまり、彼の治める地方が攻めるのにさほど手こずらないか、大きくないとき、縁者の一人を総指揮官に任命したが、広大な地方の場合には、王自らが軍隊を率いた。戦争の原因を問わず、敵が平和裡に帰順してきたとき、王は寛大な心で彼らを受け入れ、数名を捕虜にし、

武将たちに奴隷として分け与え、仕えさせた。隷属させたとは言え、それは、わたしたちが数多くの地方で〔インディオに対して〕行っているようなものではなかった。捕虜には、できるかぎり害を加えてはならなかった。王がそう命じ、指示したからである。

王は新たに人々を征服した場合、時を移さず、被征服者たちやその妻に、クスコ風の衣装を身につけ、また、石造りの館や太陽の神殿を建設するよう命じた。さらに、王は彼らに、ママコナ、つまり、太陽に仕える敬虔な女性、すなわち、修道女を差し出すよう命じ、その他にも奉仕を求めた。同様に、王宮や倉庫、それに、後述するように、兵士たちのための宿舎も築くよう命じた。

Ⅱ－7 (二五八) この〔パチャクティ〕王が定めた法律の一部、とくに、臣下の結婚式を称え、盛大に祝う習慣。身をもちくずした女性が一人もいなかった理由、ならびに、女性たちが守った徳高い節操について。

王はそのように稀に見る熱意を示して、臣下や臣民が一人残らず、妻を娶るよう、賞賛すべき管理を行い、配慮を払い、正しい習慣と国制の秩序を整えていた。そうして、王は身をもちくずした女性の存在を禁止した。そのように細かい配慮が行き届いた非の打ち所のない統治が行われているかぎり、身をもちくずした女性などまったく必要ではなかったからである。したがって、ペルーの人々の間では、女性が気まぐれに愚行に耽るのは忌まわしい、嫌悪すべきこととみなされていた。この件について、スペイン人が証言しているところでは、彼らは、それらの王国が繁栄を極めていたところに初めてその土地に足を踏み入れたのだが、そのとき、節操と純潔の徳が実に見事に守られているのを目にしたらしい。また、そのスペイン人自身の話によると、クスコの町には、非常に身分の高いご婦人方が大勢、住んでいるのを目撃したという。彼女たちは実に平静かつ穏やかに家族や家を守り、貞淑な良き妻として、純潔を堅く守り、誠実な暮らしを送っていた。彼女たちはそれぞれ、邸で働く住み込みの女性を15ないし20名、従えていた。その女性たちも貞淑で、礼儀を弁え、身なりの整った、節度ある人たちだった。

以上、これは実際にその様子を見て書き留めた一人の善良なスペイン人の記した言葉である。彼は、それに関連して、その様子はまったく注目すべきことだと記し、さらに言葉をつづけて、当時、クスコの町およびその周辺には、そのような身分の高い女性が6000人以上いたと思うと書き記している。しかも、その中には、彼女たちとともに誠実にして徳高い生活を送っていた侍女たちは含まれておらず、侍女たちは2万人を越えていたという。それらの数字には、大勢のママコナは含まれていない。ママコナたちは、スペイン人が太陽の神殿を破壊し、荒廃させたあとも、それまでと同じように、修道女つまり、敬虔な女性として節操を堅

く守って暮らしていた。(先記の善良なキリスト教徒が言うには) 神がこのよう
な賞賛すべき節操と善意とが廃れてしまう原因となった人をお許しになりますよ
うに。

話を結婚に戻すと、すでに何親等の親族において、結婚が行われていたかは記
した。つまり、彼らは通常、妹、従姉妹、叔母、姪とは結婚しなかった。身分が
高かろうと低かろうと、首長であれ臣下であれ、それに逆らうと、甚だしい不正
とみなされた。それが認められていたのはインガたち、つまりクスコの支配者、
至高の王だけで、それは王位を受け継ぎ、継承するという理由からだ。つま
り、インガとその妹の間に生まれた男子が誰よりも血筋の確かなものとして、[王
位を] 継承したのである。インガ以外の人先記の親等内の人と結婚したり、好
ましくない関係をもつのは不当であり、忌まわしいことだった。

姦通は、両者の合意による場合、二人とも殺された。また、もし男が既婚女性
を無理やり犯した場合、男だけが死をもってその代償を払った。

窃盗は厳しく罰せられた。もし盗んだものが相当な価値のものであれば、初犯
でも、死刑に処された。なぜなら、人々には、物を盗む理由がなかったからであ
る。つまり、王は、貧しい人々が赤貧に苦しんでいるとき、彼らに物資を調達す
るよう心を配り、その旨を命じていたし、放浪者が出ないように、また、全員、必
要とする物資を手に入れるために働くよう、指示していたからである。さほど価
値のないものを盗んだり、ちょっとした諍いやそれに類したことを犯した場合、
それぞれの村の首長と司政官が軽罰を科した。例えば、犯罪者の背中を石で数発
叩いたり、それに似たようなことを行なった。

人を殺害した者は容赦なく、死罪に処された。

嘘を吐いた人も、その嘘の程度に応じて、厳しい罰を科された。たいていの場
合、嘘を吐いた女性は、たとえその嘘が取るに足りないものであっても、罰に髪
を刈られた。

妖術師や呪術師、すなわち、妻を子どもの産めない体にしたり、夫を性的に不
能にして妻に近寄れなくしたり、呪術で人を呪い殺した者は例外なく、実に残酷
な刑に処されて殺された。それは、彼らの間で、悪魔と契りを結んだに違いない
一部の邪悪な人たちがよく行っていたことである。そのような犯罪者は場所を問
わずに処罰されたわけではなく、必ずクスコの町へ連行された。それはクスコの
町で刑を執行し、その死と罰を王国中にできるだけ広く知り渡らせるためだった。

村に害を加えた罪やその他の重罪は、インガ王が各地方に配置した司政官もし
くは執事によって罰せられた。司政官や執事がインガ王ととりたてて相談もせず、
また、王の命令もないまま、死刑を宣告することはまずなかった。なぜなら、す
でに記したように、刑事裁判権はほぼすべて、少なくとも、死罪に関する権限は、

王自身が留保していたからである。